

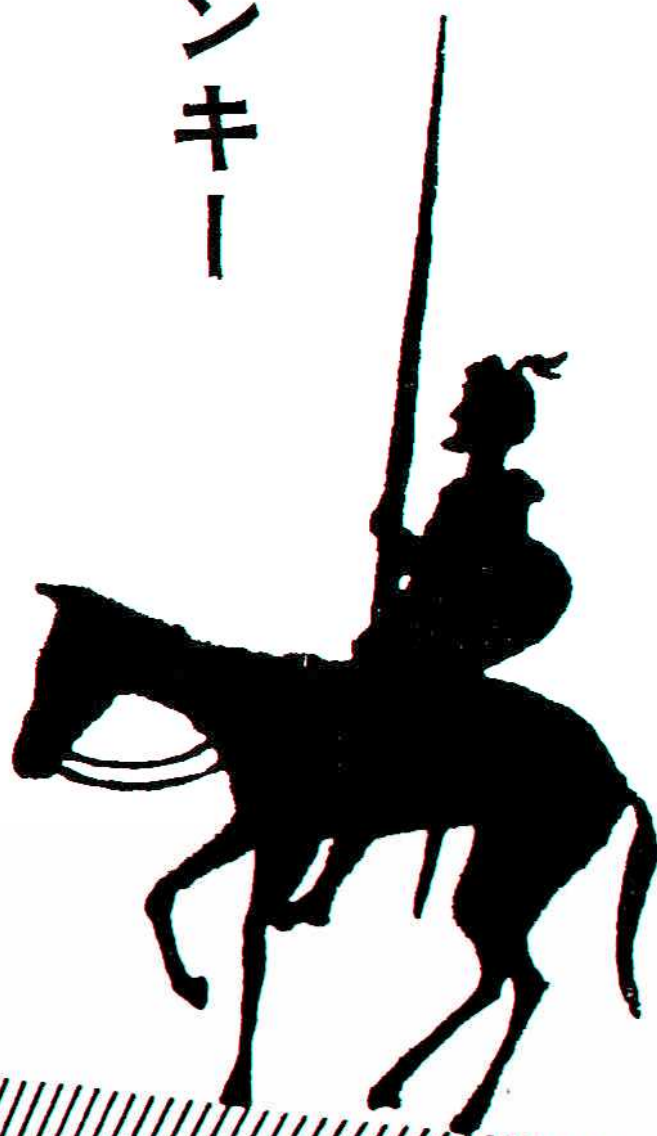
鈍才

ドンキー



講書房

鈍才・ドンキー



鈍才・ドンキー

著者 © 平 正明

一九七七年四月二〇日——第一刷発行

定価四八〇円 下二二〇円

発行者 明石高尚

発行所 濤書房

東京都港区南青山五―六―一四

電話 東京四〇九―七一二七

0295-770420-5636

印刷 真秀印刷株式会社

乱丁・落丁はお取替え致します。

序に代えて

——鈍才諸君に贈る——

人間、オギヤーと生まれて、誰だって一生に一度ぐらゐは、「あいつは秀才だ！」なんて言われてみたいもんだ。

だが、そんなこと未だ^{いま}一度も無いままに何時の間にか人生半ばに來ているのが、われわれ鈍才多くの運命だ。

しかし、チョツと、待て！

一寸の虫にも五分の魂——というではないか。

冗談^{じやうだん}じゃない。

何も秀才ばかりが人間じゃアンメエ……。

鈍才には鈍才の「魂」があるっていうものだ。

一枚のペーパーテストで満点を探ることがそんなにも偉いことなのか。

学校で一番になるっていうことがそんなにも価値あることなのか？

まあ、出来ないよりは出来た方がいいし、その努力については敬服しよう。

だが、怠け者は別として、いくら努力しても出来ないものは仕方がないではないか。

それなのに現状はどうしたのか。

一体全体、みんな何を考えているんだらう。

明けても暮れても、みんながみんな秀才になろうとし、みんながみんな一流高校を目指し、み

んながみんな東大へ入ろうとでもいうつもりなのか？。やれ学、習、塾、だ、やれ実、力、テ、ス、ト、だと誠に
 スサマジイ限りの昨今、そんなに頭の中にばかり詰め込んでしまつて、今に日本列島が頭の方か
 ら大爆発でも起こさないかと心配になつてくる。

おまけに、偏差値なんぞというワケの分らぬ烙印ちくいんまで押されて、出来の悪い連中はまさに青息あおいき
 吐息といきだ、

だいたい 偏差値 なんてケ、チなもので人間の 「すべて」 が計り知れるものではあるま
 い。

それなのに頭で得ることばかりに執心するものだから、肝心の心の中のものをみんな放り出し
 ていっちまう。それこそヘッセの「車輪の下」ジキだ。

若い多感な君たちが、毎日どれほどのもの失っているかと思うだけで胸がツマってくる。まっ
 たく「偏差値」 なんぞクソ喰えと叫びたい。受験制度がどうの、学歴社会がどうの、大上段に
 構えて教育の荒廃を議論するのも結構だが、われわれ教壇に立つ身にとって、明日あしたが問題な
 だ。

明日あしたはどうしよう？。

君たちは待っていてはくれない。

お偉い方々が頭をひねっている人類発生以来の大問題に対して、たかが中学校の一教師がどう

アガいてみたところで、しよせんは、犬の遠吠え、ゴマメの齒ギシリということになるかも知れないが、止むに止まれず敢えて天下に一言物申そう。

それがこの『鈍才・ドンキー』だ。

自分もかつてはショウノナイ鈍才であつた。いや、今でもちつとも変りはしないのだが――。だからこそ君たちの氣持が痛いほどよく分る。

わが愛すべき同胞よ！。

わが愛すべき同類項よ！。

――まあ、クヨクヨしなさんな。

鈍才には鈍才の生き方があるというものだ。 鈍才魂だ！

頭がダメなら心でゆこう。

君たちは若い。若いから悩む。

実に羨ましい。大いに悩め、もっと悩め！。悩むことは若者の特権ではないか。

友人のこと 進学のこと 将来のこと 恋人のこと……その他もろもろ。

しかし、君は今までに何かに向つてと、とん魂を打ち込んだことがあるか。

何かに向つてと、とん悩みぬいたことがあるか。それこそ寢食も忘れるくらいに一つことに没頭したことがあるか？。

たとえば、恋愛についてでもいい。

近眼たちが恋をしている……なんて哲人ニーチェはヒクッているが、マーケットで商品を買うような安っぽい規格品みたいな恋は止めようや。どうせするなら一世一代のをヤラカセ。

かのエジソンを見ろ！。

愛する人の声を永遠にしたいがために彼は蓄音器を発明したではないか。

ダンテはベアトリーチェのために 神曲 を書き、ベートーベンはエリーゼのために名曲を残した。だが、そんな大天才の真似をしろといわれても、悲しきかなわれわれ鈍才はどうシャッチョコダチしたって追いつくものでもあるまい。

要はせめてもう少しどうにかならないものかということだ。

心でゆくと決めたなら 魂の恋 をしてみろよ。

この天地自然の力だけは、誰しも平等に授かっているんじゃないのかなあ。
そんなところから君の道は開けるかも知れないぜ……。

青春と恋に不可能はないというが、まさに君自身の誰にも真似できない 青春神話 を生み出す時だ。

さあ、鈍才諸君！。

大きく胸を張って、明日からは誇り高き 鈍才魂 でゆこう！！

この書が、わが愛すべき鈍才諸君のために、いささかの道しるべともなれば嬉しい。
そして、人生の応援歌ともなれば……。

一九七七年三月

東京都千代田区立練成中学校

教諭 平 正 明

目次

序に代えて

鈍才諸君に贈る……………1

第一章 王子村のドンキー

ターザンに憧れるの章……………11

第二章 中学校時代

ロビンフッドに憧れるの章……………23

第三章 高等学校時代

初恋を知り、旧制高校に憧れるの章……………41

第四章 浪人時代

ドン・キホーテを地で征くの章……………65

第五章 大学時代

ハムレットに成りそこないの章……………91

章六章 土方のドンキ―

三ヶ月で会社を首になるの章……………147

第七章 中学校教師となる

こんなデタラメ教師が一人ぐらい居てもいいではないかの章……………171

あとがき……………187

装丁・著者

表紙カバー・雲と野菊と朴^{ほお}歯^ば

扉 絵・ひとり征くドン・キホーテ

第二章 王子村のブンキー

——ターザンに憧れるの章——

吾が輩ドンキーのふるさとは、東京も下町の外れ 王子 という町だ。

江戸時代には、王子村といい、都塵を嫌って、文人墨客など閑居した、と聞く。

江戸名所案内にも載っていたという 飛鳥山あすかやまの花、その下を流れる溪流 石神井川しやくじいがわの紅葉、落

語王子の狐で有名な王子稲荷大社、土地の名主、波多野屋敷を解放して造った 名主の滝 など
ドンキーの部屋の二階の窓から指呼の間にあった。

春は桜、夏は滝浴び、冬は稲荷の境内一杯に立ち並ぶ初午市はつうまいちの露店や、神楽囃子かぐらばやしの大鼓、笛の
音にのって近郷近在から人々が賑かに集って来たもんだ。

それが近頃ではどうだ。この佳い街並も、アパートやビルが立ち並び、丘は切り崩され、櫟けやきや
椎しいの古い大木もすっかり姿を消してしまった。

その中で変らないのは、この小さな町の中空に、ひとときわ高くそそり立ち樹齡五百年ともいわ
れる稲荷大社の大銀杏おおいちようだ。この大木を仰ぐとき、ドンキーにはかつて町中をわがもの顔に駆けず
りまわった少年の日々が彷彿ほうふつと浮んでくる。

ドンキーの少年時代は、そんな鄙ひなびた自然の中で培つちかわれていったのだが、もう一つ時代ものん
びりしていた。戦後間もない頃で、食うものも、着るものもなかったが、あるいは今の子供たち
よりもずっと幸せだったのではなからうか？。学校から帰ってもおやつ一つあるわけでなく、水
道の蛇口から水をがぶ呑みし、空腹も忘れて、もっぱら遊びほうける毎日であった。

今日のように、冷えた飲みものや、甘い菓子がたらふく食えるわけでもなかった。寝転んでテレビも見られなかったが、いまと違ってはそれらのことに感謝さえしている。あの忌^{いま}わしい学習塾なんかが一軒もなかったなんていうのも実に愉快ではないか。学校から帰って来て寝るまで、何ものにも束縛されない自由があった。腹は空かしていたが、遊びという名の大きなビフテキを、毎日腹一杯食えることが出来たのだ。このビフテキはいくら喰っても、身体の方はちっとも太らなかったが、ドンキーの夢は日増しに逞^{たくま}しく成長していった。

一体、人間という奴は、衣食足りて、ヌクヌクと贅^{ぜいたく}沢な生活に馴^{なじ}んでしまうと、肝心な意欲の方が眠ってしまいうる。動物園のトラがそうだ。毎日、飼育係の運んでくれるでっかい肉の塊をたらふく喰って、ごろ寝して暮すうちに、いつの間にか、百獣の王たる貫録を失ってしまう。檻^{おり}の中にドデンとひっくり返って、ぬいぐるみの人形みたいにふやけたトラがアクビを連発しているさまはどうしようもない。これじゃあならんと、ある動物園が肥満体のトラ公に減食を奨励したところ、効果はたちまちにして現われたそう。その眼はランランと輝き、胴はしなやかに引き締まり、空っ腹の底から牙をむいて天に向って吼えだしたという。

野性にかえったのだ。

やはり人間も、ぬいぐるみのトラになってしまつては駄目だ。

特に成長期の少年時代に、空腹という試練を課せられることは、肉体的にも精神的にも大いに